

特集 コロナ禍のなかで、子どもたちは、学校は、文化は… ＜その3＞

あいち民研通信では、第180号別刷(7月5日発行)と第181号別刷(9月4日発行)で「特集 コロナ禍のなかで、子どもたちは、学校は、文化は…」を組みました。今号も引き続き特集を組みました。今回は、採用後4年目と1年目の若い小学校教員3人に体験を綴ってもらいました。「コロナ禍での休校、その後の学校再開」という異常な事態を、若い教師がどのように見て感じたのか、それぞれ読み取っていただければと願っています。



【 寄 稿 】

「コロナ禍」の学校について

佐藤 涼太（小学校教員 6年生担任）

1. はじめに

2020年2月27日の夜、安倍晋三首相(当時)は、全国の小中高校と特別支援学校について臨時休校するように要請した。新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための措置としては、当然の要請だと感じる。しかし、報道されたのは木曜日の18時30分ごろ。自分は、自宅にてニュースの報道でそのことを知った。つまり、現場で働く立場の人間にも事前に知らされていないことだった。急な事態にももちろん現場は大混乱である。休校に向けた準備もないまま、翌日の金曜日が最終登校日となった。

本レポートでは、現場での混乱や自分自身が感じたことを、まとめていくこととする。

2. 突如始まった「休校期間」

教員にとっても子どもや保護者にとっても

突然の事態であった。自分は、5年生の担任をしていた。学習内容も途中であったことからその後の学習をどうするのか、という課題が大きな問題としてのしかかった。「途中やりだった図工の作品作りはどうするのか?」「終わっていない授業はどのようにしたら良いのか?」など、様々な不安に駆られたことを覚えている。休校前最後の登校時に、子どもたちから、「来週から学校は休みなんだよね?」と尋ねられたが、自分もニュースの報道での情報しか得られていなかったので子どもの問いにどう答えて良いかわからなかった。それは、現場の置き去り感を強く感じた瞬間だった。非常事態だったので仕方がないことかもしれないが、最後の1日は、自分を含めた職員全員が何をすべきなのかわからない中での業務となった。自分は、クラスの児童に現在の状況を改めて伝え、できるだけ

の授業を行なった。帰りの会では、「これからどうなるの?」「この先の勉強はどうするの?」と言った疑問を投げかける児童もいたが、この時点では何も伝えることができなかったため、「学校が始まった時に元気に来られるように、日頃から行っていた手洗いやうがいなどの一人一人ができることを忘れないで続けて欲しい」と伝えた。

3. 休校期間の業務について

自分の学校では、家庭で面倒が見られない児童を学校に登校させることになった。1日に20人ほどの児童が学校に来ていた。しかし、来校する児童への学習支援はできず、休み時間にも基本的には会話をしてはいけないなど子どもたちにとっては苦痛な時間となっていた。期間の途中からは制限はあるものの校庭で遊ぶことができるようになり、少しだけ子どもたちも過ごしやすい様子が見られた。

その他の業務では、学習プリントを配布して家庭学習として取り組んでもらう事となったため、そのプリントの準備に追われていた。大量のプリントを印刷し束ねるということに多くの時間が費やされた。この学習プリントの効果については、後ほど述べたい。

ある程度時間が経つと、在宅勤務が可能となった。自分は、名古屋駅を通るため在宅勤務が可能になる前から時間休を使い通勤ラッシュを避けて通勤していたため、在宅勤務が可能になることはありがたかった。しかし、在宅勤務の内容が大きな問題となった。次年度の年間行事の計画や授業準備などを行っていたのだが、当時はまだ見通しが持てずにとりあえずできることを行っていた。その結果、作った資料や授業の準備が役に立たなかったこともあり非常に残念に感じることもあった。運動会や遠足などの大きな学校行事に関しては、やるかどうかの判断ができなかったために計画を立てることも難しく、実態のない疲労感を強く感じた。また、同僚との意

思疎通も難しいこともあり教員の在宅勤務の難しさを感じた。

4. 学校再開後

学校が再開して思ったことは、児童の学力差ができていうこと。前述の通り休校期間中には、大量の学習プリントが各家庭に届けられた。昨今は、塾やタブレット式の教材も普及していることから子どもたちの中には家庭での学習でも問題なく学習内容を身につけることができる子どもも見られた。しかし、塾やその他教材などを活用することが困難な子どもや家庭環境が不安定な子どもにとって学校から課せられた学習プリントの効果は薄かったと感じた。また、この問題については、「教育の機会均等」の考え方からも課題があると感じられた。

学習面で不安な要素が見られたが、登校してくる児童は笑顔だった。そのことはとても嬉しく、学校という場の必要性を強く感じた。学校再開から時間がたった現在でも、大きな問題はなく楽しい学校生活を送れている。自分も、完全ではないものの授業ができることや、子どもたちと何気ない会話ができる学校生活を楽しんでいる。

5. おわりに

コロナ禍で子どもたちは、多くのストレスを感じながら家庭での時間を過ごしていた。学校が始まり、そのようなストレスも少しずつ和らいでいるようにも見られる。学習に関しては、授業時間の確保が大きな課題となっている。しかし、このような状況でも運動会や遠足などの学校行事が「子どものため」という名目で行われている現状もある。これからも続くであろう「コロナ禍」で学校が本当に大切にすべきことは何か。何が「子どものため」になるのかを自分自身も悩み、考えながらこれからの学校生活を送りたいと考える。

コロナ禍のなかで、子どもたちは、学校は、文化は…

青島 慎次（小学校教員 4年生担任）

1. はじめに

大学院の博士前期課程を修了し、ようやく始まった私の教員生活1年目は、新型コロナウイルスの猛威によって2か月も短くなってしまった。いまだに学校教育の「普通」の日常を送ることはできておらず、学校教育の「普通」を知らないまま半年が過ぎてしまったが、「例外」しか知らない1年目の自分だからこそ気づける「普通」への違和感と、小学校の教師としての半年間で感じたことを報告したい。

2. 休校期間のこと

前年度の2月から学校に来ていない子どもたちにこれからどのように声をかけたらいいのだろう、今子どもたちは何を考えながら過ごしているのだろう、と不安しかないまま始業式が終わった。しかしながら、その日中に休校期間が延長されることが発表され、そこから2か月間それが続くことになってしまったのである。結果的に、初任者の私にとってその2か月間があったことは幸運だった。「普通」ならば教師は、担任発表から1週間ほどで新学期の準備を行わなければならない。くわえて、初任者はその学校の施設やシステムについて、またその学校独特の細かな文化など、膨大な新しい知識を頭に入れなければならない。そこに同僚との関係性づくり、クラス経営が加わるのであって、心身の負担はとてつもないだろう。それらを2か月かけて行うことができたことは、正直なところとても幸運だった。

また、休校期間中の2か月間は、学校教育の根本的な意義を思考し直すことになったのではない。名古屋市のほとんどの小学校は、休校期間中の子どもたちの学びを学習プリントによって保障しようとしたけれど、仮に自宅での学習プリントで学校教育の学びが充足されるのならば、学校教育は何のためにあるのだろうか。また同時に、企業や大学が続々とZoomなどを活用して在宅での仕事や学びに移行していく中で、学校教育が取り残されいる感覚を覚えた。職員室の中でオンライン授業に関する話はまったく出ず、それを可能にする設備はそもそも整っていない。オンライン授業が子どもたちの学びにとって意味あるものかどうかを試し、議論することもできないままコロナ禍に飲み込まれる学校教育や教師の無力さを痛感した。

3. 学校再開後のこと

6月によりやく、本当の意味での私の教師1年目はスタートした。4年生の子どもたちは、みずみずしい感性で私の発する言葉を受けとめ、自分なりの言葉で返そうとしてくれる。最初の宿題として「先生への手紙」を出した。この子たちとなら楽しく1年を過ごせそうだな、と直感的に感じた。

しかしながら、そうした期待を感じながら迎えた新学期を、「例外」が邪魔をした。学校再開と同時に始まった膨大な量の感染防止対策は、素直に行う気には到底ならないものばかりだった。たとえば、教室やトイレの消毒を授業後に教師が行うことになった。ただ

でさえ少ない教材研究の時間が消毒によってさらに奪われた。これは本当に教師の職務なのか、甚だ疑問である⁽¹⁾。また、子どもたちはマスクの着用を強制され、給食中は一言もしゃべらないこととなった。音楽の授業では「心の中で歌唱(?)」することになり、接触の恐れのある遊びは禁止された。さらには、授業中における子ども同士の対面での長時間のマスクなしでの対話はできるだけ避けるように要請された。

とりわけ、私にとって苦痛だったことは、グループ学習が制限されたことだった。大学院に在籍時、私は子どもの権利論、とりわけヴィゴツキー心理学を基礎とした子どもの権利論について研究していた。そのなかで子どもとは、誠実に応答してくれる大人やまわりの友だちとの豊かな関係性の中で学び、成長発達する存在である、と学んだ。また、教育学者の佐藤学も指摘しているように、子どもにとっての学びとは対象や他者や自己との対話そのものであって、学びはコミュニケーションの過程において理解される⁽²⁾。こうした理解のもと、私は教師になったときには、子ども同士がお互いに学び合うことのできる授業づくり、具体的には3、4人のグループでの「学び合い」に取り組もうと意気込んでいた。

しかしながら、グループ学習を制限せよという要請が私を苦しめることになる。幸いにも、教務主任は私の考えに理解を示してくださり、感染症対策ガイドラインに沿った範囲でグループ学習を行うことを認めてくださった。ただ、他の4年生の先生方からはよく思われていないようで、「何かあった時に責任が取れない」「他の学年もやっていないからね」と遠回しにくぎを刺してきた。学校文化の一つの特徴として、「出る杭は打たれる」ことがあげられるだろう。平等性を重視する文化が悪い方向であらわれている。私はこうした学校文化を実感しつつ、自分の思いや探究心と、感染症対策のアリバイ作りとを天秤

にかけなければならなかった。

悩んだ結果、私は「学び合い」を日々の授業で行うことを決断した。それを決定づけたのは、6月のある日の算数の授業である。私から子どもへの一方向の授業のなかで、子どもたちの顔から知的好奇心が消えていく様子が手に取るように感じられたのである。「一斉授業」では子ども同士が学び合うことができない、子どもたちに学びを保障できない、と痛感した。

4. 現在のこと

それから現在に至るまで、毎日小さな手ごたえと大きな反省をくり返しながらか、少しずつ「学び合い」を続けている。授業のなかで、子どもたちにとって少し難しい課題を設定し、3、4人のグループで取り組む。グループで一つの統一した答えを出すのではなく、あくまで個人の学びのために他の友だちの意見や考えを聴き合う。小さな手ごたえを報告するとすれば、普段の授業のなかでも、私が指示せずとも、その授業の課題についてまわりの友だちと小さな声で話す場面がみられるようになったことである。また、教える一教えられるという力関係ではなく、子どもたち同士が対等な関係性で学び合う様子が、ほんの少しずつだが見られるようになった。子どもたちのうれしい姿である。

以上、佐藤学の言葉を借りれば、学びの実践は、「学習者と対象との関係、学習者と彼／彼女自身（自己）との関係、学習者と他者との関係という三つの関係を編み直す実践」⁽³⁾であり、ただ「課題をみんなのできるようになること」ではなく、子どもが成長発達するための他者との関係性を作り出すことだと私は理解している。まわりの先生方からは疎まれるかもしれないけれど、コロナ禍の学校教育の中でもできる限りそうした学びを子どもたちに保障したい。

ここまで示してきたように、「例外」はさ

まざまな困難を子どもたちの学校生活にもたらした。しかしながら、「例外」は「普通」を見直すきっかけを作ってくれたと感じることもいくつかある。たとえば、3学期制から2学期制への移行である。教師が行わなければならない子どもの学期末評価も2学期分になることで、業務の負担を大幅に削減することができるのではないか。

また、今年度の朝会や児童集会、運動会などの学校行事の縮小・削減も、今後続けていくことを前向きに検討できるだろう。現時点で、残念ながら(?)、そうした学校行事を行っていない児童にマイナスの影響はない。何を学校教育の本質と考えるかで意見は分かれるだろうが、子どもの学びに直接結びつかない「わりに」教員に負担がかかる学校行事は、今後見直される必要があると感じるのである。

さらに、今年私が受けるべき初任者研修も大幅なスケジュールと内容の変更があった。教育センターでの4～6月の研修はすべて中止になり、また夏休み期間に行われる宿泊研

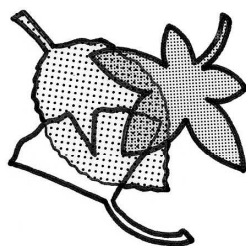
修も中止となった。代わりに、勤務校で動画や資料を視聴することとされたが、正直なところ、この内容をわざわざ集まってやるのか…と感じさせる程度の研修内容だった。初任者として行う必然性のない研修も、今後見直される必要がある。

おわりに

私の拙い文章をここまで読んでいただき、感謝申し上げます。大変な年に教師になってしまい、疑問が尽きない学校教育であるけれど、日々子どもたちの学ぶ姿に活力をもらっている。常に自分の授業や子どもたちへの関わりが正しかったのかを考え続ける毎日だけれど、子ども一人ひとりが少しずつ成長していると感じる瞬間がある。子どもたちになんとか質の高い学びを保障したいし、一人ひとりにとってよりよい成長発達を保障したいと感じている。これからも常に反省的でありつつ、批判的思考を忘れずに教師を続けていきたい。

註

- (1) 2学期になってからは、消毒は児童が行ってもよい、とされた。これも果たして正しいことなのだろうか。本来外部の機関が担うべき作業を、「学校教育」というラベルを貼って子どもたちに押しつけているとしか感じられないのである。
- (2) 佐藤学『学びの快樂 ダイアログへ』世織書房、1999年
- (3) 同上



コロナ禍における学校の様子

武田 剛（小学校教員 3年生担任）

1. はじめに

私は、名古屋市で今年から教員になりました。4月から、子どもとの初めての出会いを心待ちにしていた矢先、コロナの影響でいきなり休校となってしまいました。

そうした状況下で、学校は、家庭での子どもの学習、年間スケジュールの変更、学校再開後の方針等、様々な対応に追われていました。また、6月の学校再開後も、新しい生活様式の中で進む学校生活に、子どもも教員も疲弊しているような気がします。

以下、そのような中での学校の様子や私が感じたことを述べていきたいと思います。

2. 子どもたちの様子

長期の休校を負担に感じた子どもは私のクラスに何人かいました。

その内の1人は、家庭内で暴力を振るう頻度が多くなったと保護者から報告を受けました。話を聞いていると、学校から配布されたプリントを無理にやらせようとする保護者とそれに対して反発する子どもという構図が見えてきました。また、そうした子どもの行動に対し、父親が心理的虐待のようなことを行ってしまったようです。幸い、学校が再開してからは子どもの暴力も落ち着き、保護者も比較的安定しています。

このことから、休校によって家庭に閉じ込められたことが、親子の距離感のバランスを崩すことにつながったのではないかと考えました。

また、学校再開後は、休校期間の生活に慣

れてしまったことと、本来なら週2回だった6時間授業が週3回に増えてしまったことから、「家に帰りたい」や「6時間授業がしんどい」という子どもが何人かいました。

そうした子どもたちの話を聞いていると、授業の遅れを取り戻そうと授業時数を増やした学校の方針は、子どもの実態を置き去りにしたものであり、学校にとって大切なことは何なのかと憤りを感じました。

3. 学校の様子

コロナの影響で、学校生活も多くの制約や変更を強いられました。

1つ目は、マスク着用の徹底です。今となつては、距離が確保できればマスクを外してもよいとされていますが、学校再開当初は子どもにマスク着用を徹底させていました。例えば、外で遊んでいる時、子どもが少しマスクを外してただけで、校長に「マスクを着けるよう指導してくれ」と言われたこともありました。子どもの中には嫌がる子もいましたが、そうした子にも強制的にマスクを着かせなければいけないのは心苦しかったです。

2つ目は、給食の様子の変更です。従来なら、子ども同士おしゃべりしながら楽しく給食を食べていたのですが、今年は、全員前向きでしゃべらずに食べるというのが学校全体の方針になりました。さらに、配膳も給食当番が配るのではなく、自分の分は自分で持ってくるようになり、その際の導線も決めて徹底するように言われました。

3つ目は、遊び方です。密や接触を避けるために、遊具で遊ぶことや鬼ごっこをすることは禁止とされていました。ただ、ボールを使った遊びなら可能とされています。この対応に対して、ボールを使った遊びが許されるのであれば、鬼ごっこも問題ないのではないかと疑問に思いました。現在、遊具は学年ごとに使う曜日を定められ、その曜日以外は使用しないようになっていますが、鬼ごっこは未だに禁止となっています。

4つ目は、朝の教室の鍵開けです。従来なら、早く登校した子どもが職員室に教室の鍵を取りに来て自分で教室を開ける、という形でしたが、今年は教員が開けることになっています。

これは、教員の働き方という点で大きな問題を孕んでいます。子どもは8時、またはそれより早く登校してきます。そこで、子どもが登校する前に教室の鍵を開けなければいけないので、教員は8時より前には学校にいないかなければなりません。また、名古屋市の教員の勤務開始時間は8時15分です。つまり、必然的に勤務時間前に出勤しなければならないということです。

こうした状況に対して、「鍵開けのために早く来た教員はその分早く帰れるようにするなど、勤務体系を変更して柔軟な対応ができないか」と同僚の教員が職員会議で発言しました。しかし、管理職は「それは難しい」との反応でした。さらに、別の同僚の教員は「みんな我慢してやっているのだから、そんなこと言わなくてもいいじゃないか」という趣旨の発言をしていたとも聞きました。

このような、教員の善意に頼ったり、それを仕方ないとして受け入れたりする空気感は、教員の働き方問題の根深さを表しているなと感じました。

4. コロナによって改善されたこと

これまで、コロナによる問題点を述べてきましたが、逆に改善されたこともありました。

まず、初任者研修が簡略化されたことです。従来なら、教育センターに集まって講義を受ける形でしたが、休校期間は、その代替措置として、動画を見たり、資料を読んだりすることになりました。この措置は、わざわざセンターまで出向く手間も省けていいのではないかと思います。

また、行事の見直しも図られました。運動会は、学年ごとに種目を考えて、2時間程度で行うことになり、保護者の観覧も無くなりました。学芸会は中止になりました。毎週行っていた朝会も、放送朝会になりました。

このように、コロナによる新しい生活様式は、これまでの学校のあり方を見直し、再考する機会にもなったのではないかと思います。

5. おわりに

コロナ禍における学校は、対応の方向性が不明確な中で、様々なことを考える必要に迫られたと思います。

その中で、子どもの実態よりも授業時数を優先する学校の方針、給食の食べ方や遊びの制限に見られるようなコロナ対策のアリバイ作りでしかない対応、教室の鍵開けに見られるような教員の働き方に関する空気感など、学校の負の側面が露呈しました。それに対して、行事の精選が行われ、教員の負担が減ったということは評価すべきだと思います。

このような状況で、初任として働いて、色々大変なことばかりですが、これからも学校の空気に流されず、常に自分の頭で考えることを意識しつつ、子どもたちと関わることでできればいいなと考えています。

